

かごしまに生きた古生物たち

地質担当 坂本 昌弥

鹿児島県は霧島山、桜島、開聞岳、薩摩硫黄島、諏訪之瀬島をはじめ、11の活火山が存在する、世界でも有名な「火山県」です。また金山など、さまざまな鉱山にも恵まれており、「資源県」としても知られています。それだけに、「鹿児島の化石」というと、あまりピンとこない人が多いようですが、しかし化石に関しても、他県を圧倒するほど多様なものが産出します。



イタヤカエデの化石（約100万年前の地層から産出）（薩摩川内市樋脇町藤本）

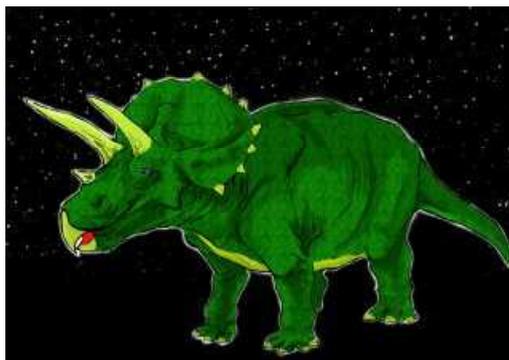
中でも古生物の研究者によく知られているものとしては、2008年に鹿児島県北西部にある獅子島で発見されたエラスモサウルスの下あごの化石です。この巨大な身体を持つエラスモサウルスは、白亜紀（1.5億年～0.65億年前）に生きたクビナガリュウのなかまであり、発見当時、研究者や古生物に興味のある人たちの間でたいへんな話題になりました。首の長さだけでも8メートルもあり、体長は約14メートル、海の中で魚類を食べて生きていたと考えられています。



エラスモサウルス（想像図）

また2013年、鹿児島県西部に位置する甑島で、これも白亜紀に生きた草食の恐竜ケラトプス類の歯の化石が発見されました。ケラト

プス類は角竜とも呼ばれ、国内初の発見として、これも古生物学者や恐竜ファンの間でたいへんな話題になりました。ケラトプス類の歯には、他の恐竜に見られない特徴があり、これが鑑定の決め手となりました。この恐竜の全長は約9メートル、体重は8トンほどもあったと考えられています。



トリケラトプス（想像図）

少し話は逸れますが、宝山ホール4Fでは米国・ユタ州で産出した肉食恐竜アロサウルスと草食恐竜カンプトサウルスの全身骨格を見ることができます。この骨格の約70%は本物の骨であり、全国でも珍しいものです。昭和41年に小川勇吉氏から寄贈されたもので、同時に寄贈された434点もの珍しい化石もここに保存・展示しています。

化石を研究するという事は、過去の地球を知ることであり、未来の地球を知ることであります。例えば、県立博物館が所蔵しているブラジル産のメソサウルスの化石（古生代ペルム紀）は、まったく同じものが南アメリカからも産出します。つまりこれは南アメリカとアフリカ大陸がかつて一つの大陸だったことを裏付けるものであり、またこれから大陸がどのように移動するかを示す証拠にもなります。このような化石を数多く研究することによって、未来の地球の姿が見えてくることでしょう。

7月26日（土）から県立博物館では、「かごしまに生きた古生物たち」という企画展を開催します。ぜひご来館いただき、'鹿児島の過去と未来'を想像してみたいかがでしょうか。